

40 モグサの産地としての伊吹山の歴史

鶴田泰平

伊吹山は滋賀県と岐阜県の二県にまたがる標高一三七七メートルの山で、古来より薬草の産地として数々の文献に登場している。また、モグサの産地として歴史上に登場する伊吹山はこの他に、栃木県の伊吹山がある。滋賀県の伊吹山は近江伊吹山もしくは江州伊吹山、栃木県の伊吹山は下野伊吹山と呼ばれた。現在、栃木県の方ではモグサの生産は行われていないが、滋賀県伊吹山麓の町では、原料の大半を新潟県・長野県と、韓国・中国からの輸入に頼りながらもモグサの生産は続いている。

モグサは「燃え草」を略したものとわれ、その原料はヨモギである。五月頃にまだ成長しきる前の若いヨモギの茎葉を採取し、充分に晒して、けんどにより粉碎をした後、石臼での挽き上げと篩・唐箕による選別を繰り返す過程を経る。尚、使用されるヨモギの種類はオオヨ

モギが最良とされ、製造過程での晒しの年数の長い程、また、挽き上げと選別の繰り返し回数が多い程、不純物の少ない良質のモグサとされる。

「伊吹山」の名称が歴史上の記録として登場するのは、『古事記』（七二二年）からで、次いで『日本書紀』（七二〇年）にも記述が見られる。それらの中では伊服岐山・胆吹山として記述されているが、モグサとの関連の記述ではない。また、記紀の「伊吹山」は江州の方である。平安時代に入り、和歌が盛んに詠まれるようになると、伊吹山は「さしもぐさ」「させもぐさ」の歌枕として数多く登場する。和歌に詠まれた伊吹山は、下野伊吹山を指すとする説が多く、ことに、江戸時代の僧で和学者でもあった契仲（一六四〇～一七〇二）によって強く主張されている。また、鍼灸師の織田隆三氏の近年の研究によると、モグサの名所としては平安時代には下野伊吹山の方が有名であり、安土時代以降、江州伊吹山が有名になっている。その変遷には、永禄十一年（一五八六）頃に織田信長（一五三〇～一五八二）がポルトガルの宣教師フランソワ・カブラルの請願により、薬草園（現存せず、正確な場

所も未詳)を開いたこと、江戸時代に江州伊吹山近辺の村が宿駅として栄え、物流が盛んになったことと、近江商人達の積極的な宣伝販売活動などが背景にあった。

伊吹山には、江州・下野の双方ともに、その山中もしくは近隣に「しめじが原」の名称を持つ土地が存在している。しめじが原(「標茅原」・「標示原」・「占治原」などと表記される)もまた「さしもぐさ」「させもぐさ」の歌枕として平安時代から鎌倉時代に掛けて数多くの和歌の中で詠じられており、伊吹山同様、モグサの名所であった。しめじが原の名称の由来として「しめし地(みだりに立ち入ることを禁止した、標示された土地)」、「しめり地(清水のき出す湿地)」、「しめつの原(下野国の下都賀の広野の意)」等がある。江州と下野の伊吹山・しめじが原の間には、何らかの宗教的な介在があったものと思われる。

この度の検討では、滋賀・栃木の「伊吹山」のモグサとの関わりの歴史を明らかにし、その背景にある宗教的介在を考察する手掛かりを得ることを目的として、①伊吹山に関する記述のある文献を分類し、②現地視察によ

る文献記述の確認をした。